

大ヴァシリイの聖體禮儀（輔祭なし）

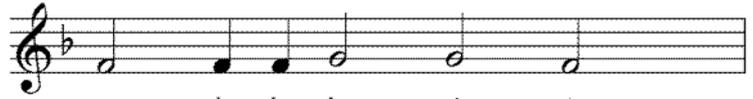
【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い  
我等皆 靈 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



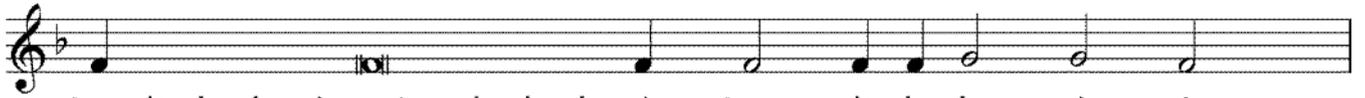
しゅあわれ めよ 。  
主 憐

司祭) しゅぜんのうしゃ わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ  
主 全能者、吾が列祖の神よ、爾 に禱る 聆き納れて 憐 めよ、



しゅ あわれ めよ 。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾 の大 なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、 聆き納れて 憐 めよ、



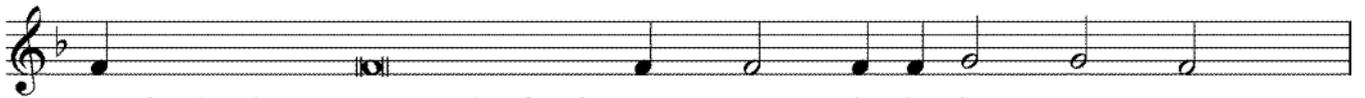
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわ く に てんのうおよ く に つかさど もの たため いの  
又我が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、



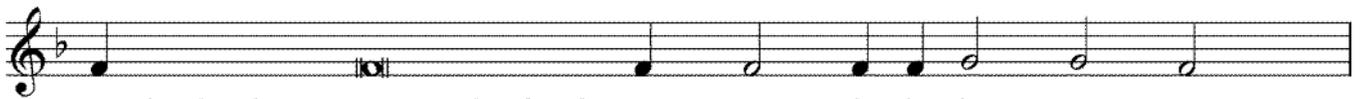
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お  
又 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教 セラフィム、及びハリストスに於  
ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい  
又我等の兄弟、諸司祭、諸 修 道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆 兄弟  
の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ 。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ  
又 恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正 教の総主教、この聖堂の建 立者、及  
び已に寝りし 悉 くの父祖兄弟、此の處と諸方とに 葬られたる正 教の者の爲

いの  
に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

ここに立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐れめ、主憐れめ、主憐れめよ。」と応えて歌う。 )

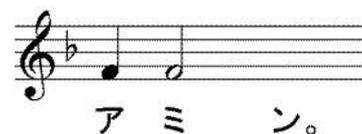
司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民

に遣し給え、 )

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

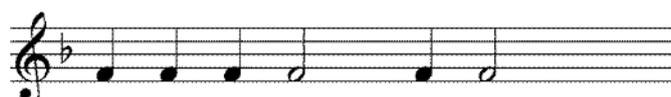
も何時も世に、



ア ミ ン。

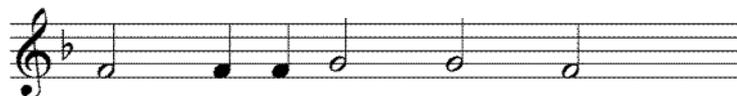
### 【 啓蒙者の爲の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



しゅあわれめよ。  
主 憐

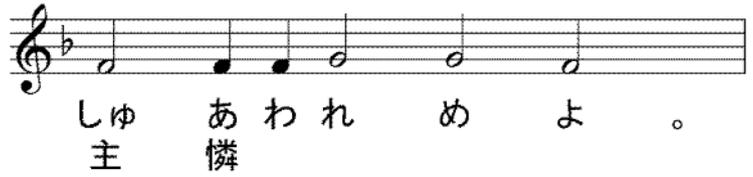
司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) <sup>ぎ ふくいんけい かれら ひら</sup> 義の福音經を彼等に啓かん、



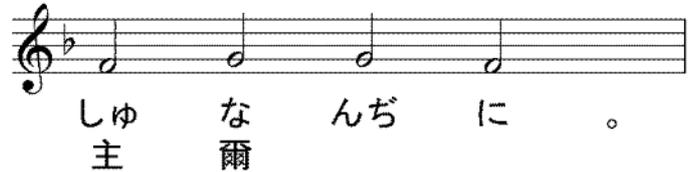
司祭) <sup>かれら そのせい こう した きょうかい いつ</sup> 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) <sup>けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわ かみ てん お なんぢ ことごと わざ かえりみ もの なんぢ ぼく けいもう</sup> 主我が神、天に居り、爾が悉くの造工を顧る者よ、爾の僕・啓蒙

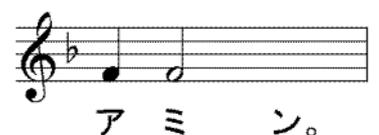
<sup>しゃ そのこうべ なんぢ まえ かが もの かえり かれら かる に あた かれら</sup> 者・其首を爾の前に屈めし者を顧み、彼等に輕き荷を予え、彼等を

<sup>なんぢ せいきょうかい とうと したい かれら ふくせい よくぼん しょざい ゆるし ふ</sup> 爾が正教會の尊き肢體となし、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不

<sup>きゅう ころも たま なんぢわれら まこと かみ し いた たま</sup> 朽の衣を賜いて、爾我等の眞の神を識るを致させ給え、 )

司祭) <sup>ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま いつ</sup> 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讚揚せん、今も何時

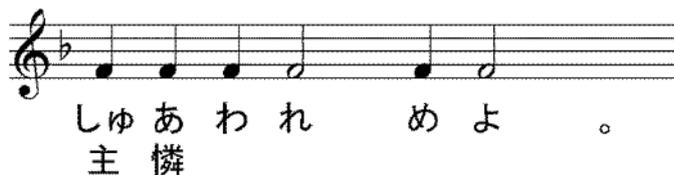
<sup>よよ</sup>も世に、



【 信者の聯禱1 】

司祭) <sup>しゅうけいもうしゃい けいもうしゃい しゅうけいもうしゃい けいもうしゃひとり ただしん</sup> 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信

じゃまたまたあんわ しゅ いの  
者 復 又 安和にして主に禱らん、



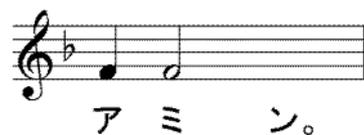
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup>  
睿智、

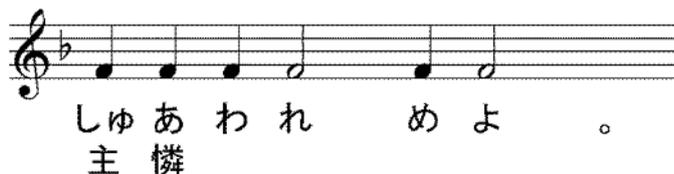
司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ なんぢ われら こ おおい すくい きみつ しめ なんぢ われら ひび た</sup>  
えざる <sup>なんぢ ぼく なんぢ せい さいだん ほうじしや ゆる たま もと なんぢ</sup> 爾の僕に、爾の聖なる祭壇の奉事者となるを許し給えり、  
<sup>せいしん ちから もつ われら こ ほうじ た もの われら ていざい なんぢ せい</sup> 聖神の力を以て、我等を此の奉事に堪うる者となして、  
<sup>こうえい まえ た なんぢ さんび まつり ささ いた たま けだしなんぢ しゅう</sup> 我等が定罪なく爾の聖なる光榮の前に立ちて、  
<sup>ちゅう ばんじ おこな もの しゅ われら つみ しゅうじん あやまち ため ささ ところ</sup> 爾に讚美の祭を獻ぐるを致させ給え。蓋爾は衆  
中に萬事を行ふ者なり、主よ、我等の罪と衆人の過との爲に捧ぐる所  
<sup>われら まつり なんぢ まえ い よる もの え たま</sup> の我等の祭が爾の前に納れられ喜ばるる者となるを得せしめ給え、 )

司祭) <sup>けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>  
蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 信者の聯禱2 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ しゅ いの</sup>  
我等復又安和にして主に禱らん、



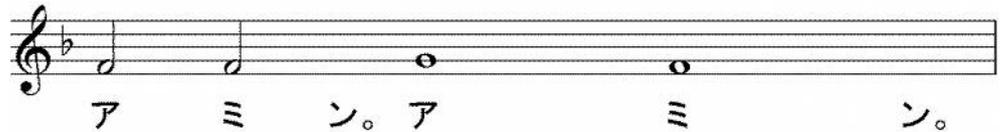
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup>  
睿智、

司祭) ( 黙誦：神・慈憐宏恩を以て我等の卑微を顧み、我等卑微にして罪ある爾の堪えざる僕を爾が聖なる光榮の前に立てて爾の聖なる祭壇に奉事せしむる主よ、  
 爾が聖神の力を以て我等を此の奉事の爲に固め、我等の口を啓き言を賜いて、  
 獻げんとする祭品に爾が聖神の恩寵を呼ばしめ給え、 )

司祭) 我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、  
 今も何時も世々に、



【 ヘルヴィムの歌 】

しゃにたてまつり  
者 獻  
て、  
このおよのつとめ  
をしりぞくべし、  
しりぞおくべえし。

司祭) ( 黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は  
 近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大に  
 して畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本性を  
 易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰なるに縁  
 りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、爾は獨  
 天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィムの主、イズラ  
 イリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾獨善にして善く納  
 るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が靈と心とを邪な  
 る思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、爾が聖神の力に藉りて、此  
 の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨なる聖體至尊なる聖血の機密を  
 行うに堪うる者となし給え、蓋我首を屈めて爾に就き、爾に禱る、爾の  
 顔を我より避くる勿れ、我を爾が僕衆の中より却くる勿れ、乃我罪  
 有りて當らざる爾の僕に此の祭物を獻ぐるを致させ給え、蓋ハリストス我が神  
 よ、爾は獻ざる者と獻ぜらるる者、受くる者と頒たるる者なり、我等光榮を爾と

なんぢ むげん ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ  
爾の無原の父と 至聖至善にして生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も

よよ  
世世に、 )

司祭) ( 黙誦：我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い

て、今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬

有の王を戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌いて、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有

の王を戴かんとするに縁るを戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril

イヤ、

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた  
我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌いて、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ べ てんし ぐん み にな たてまつ ばんゆう  
今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有

の王を戴かんとするに縁るを戴かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril

イヤ、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ  
神よ、我罪人を浄め給え、神よ、我罪人を浄め給え、神よ、我罪人を浄め

たま  
給え、 )

## 【 大聖入 】

司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ  
今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう  
願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう  
願くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

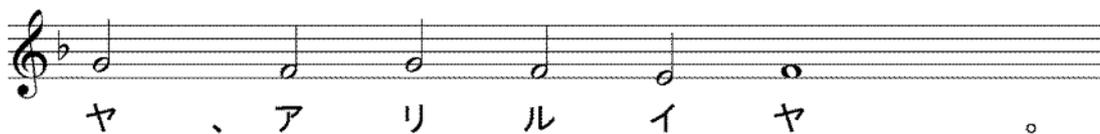
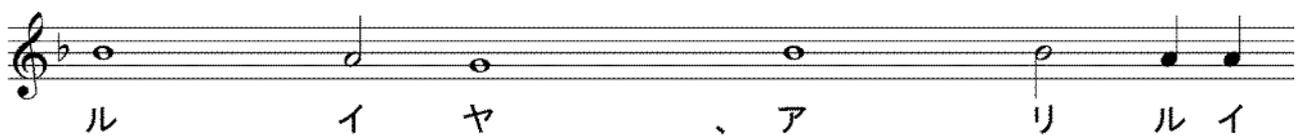
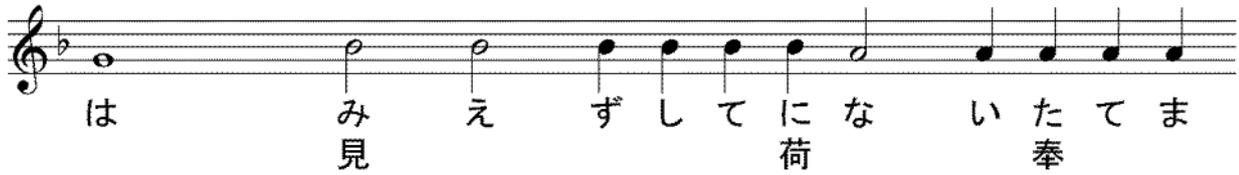
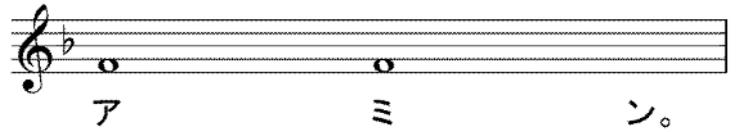
主 教 ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

教ニコライ、主教ペトル、(及び殊に記憶せらるる某)我等の已に寢りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ  
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと  
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等（及び殊に

きおく つね きおく いま いつ よよ  
記憶せらるる 某）を恒に記憶せん、今も何時も世に、



司祭) ( 黙誦： 尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて

おお あらた はか おさ  
覆い、新なる墓に藏めり、

ハリストスよ、爾は神なるにより、體にて墓に在り、靈にて地獄に在り、右盜

とも てんどう あ ちち せいしん とも ほうざ あ かぎり もの いっさい み たま  
と偕に天堂に在り、父と聖神と共に寶座に在り、限なき者として一切を満て給

えり、

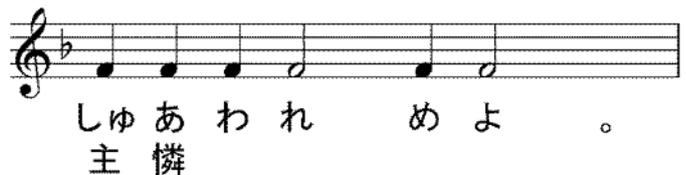
ハリストスよ、我が復活の泉たる爾の墓は、生命を施す者、地堂より美  
しき者、実に如何なる王の宮よりも耀ける者と顯れたり、

尊きイオシフは爾の潔き身を木より下し、淨き布に裹み、香料にて覆い、  
新なる墓に藏めり、

主よ、爾の恵に因りて恩をシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給え、其  
時に爾義の祭、獻物と燔祭を喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に  
犠牲を奠えんとす、)

【 増聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が禱を増し加えん、



司祭) 獻げたる尊き祭品の爲に主に禱らん、



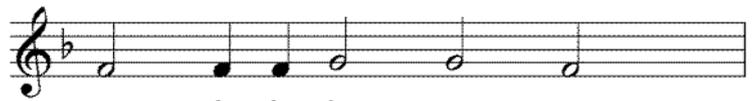
司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱  
らん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

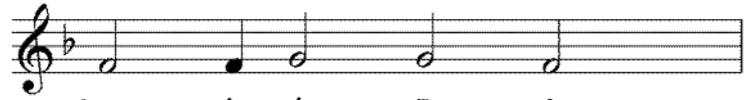


司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



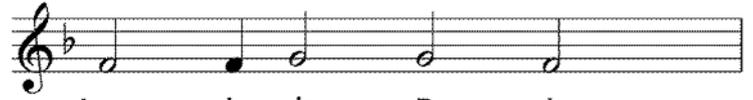
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい</sup> 此の日の 純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



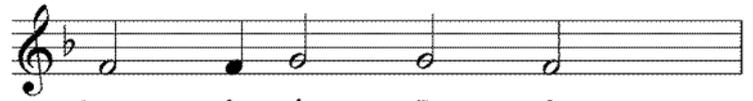
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま</sup> 平安の天使、正しき 教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



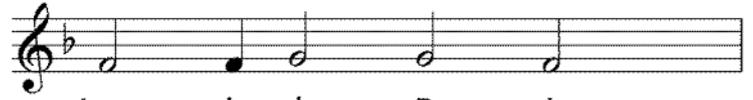
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる</sup> 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



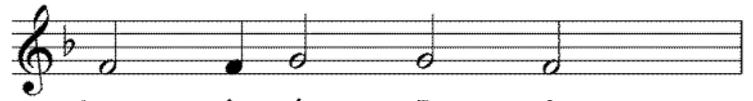
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま</sup> 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

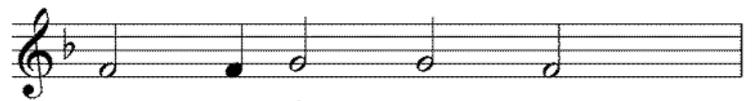
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ</sup> 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我等の生命の 終 がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

<sup>おそ しんばん おい よろ こたえ たま</sup> ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、

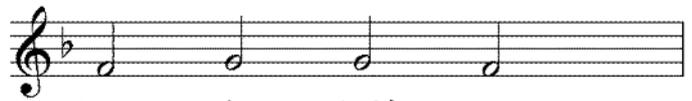


しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと</sup> と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

<sup>われら いのち もつ かみ いたく</sup> の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦：主我が神、我等を造りて此の生命に入れ、我等に 救 の道を示し、我等に天  
上の奥密の啓示を賜いし者よ、爾は爾が聖神の力を以て、我等を此の奉  
事の爲に立て給えり、求む主よ、我等が爾の新約の奉事者 爾の聖機密の役  
者となるを嘉し、爾が慈憐の多きに因りて、我等 爾の聖なる祭壇に近づく者を  
納れ給え、願くは我等は、我が罪と衆人の過との爲に、爾に此の靈智なる  
無血の祭を獻ぐるに堪うる者とならん、祈る 爾之を爾の聖なる天上の無形  
の祭壇に置き、馨香として之を享け、我等に報ゆるに 爾が聖神の恩寵を降す  
を以てせよ、神よ、我等に臨み、此の我等の奉事を 顧みて、之を享くこと、アヴ  
エリの 獻物ノイの祭、アブラアムの燔祭、モイセイとアアロンとの神職、サムイ  
ルの和平祭を享けしが如くせよ、主よ、爾曾て聖使徒より此の眞の奉事を享け  
しが如く、我等罪なる者の手よりも、爾の仁慈を以て此の獻物を享け給え、此  
くの如く、我等を玷なく 爾の聖なる祭壇に奉事せしめて、我等に 爾の義なる  
報の畏るべき日に於て、忠にして智なる家宰の賞を得るを致させ給え、 )

司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す 爾の神  
と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信経 】

司祭) 衆人に平安、



なんぢの し んにも 。  
爾 神

司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、

ちちとことせ いしんの、いったいにし  
父 子 聖 神 一 體

てわかれざるせ いさんしゃを、  
分 聖 三者

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅわれ ちから われなんぢ あい</sup>主我の力よ、我爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は私の防固、私の避所なり、<sup>しゅわれ</sup>主我の  
<sup>ちから われなんぢ あい</sup>力よ、我爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は私の防固、私の避所なり、<sup>しゅわれ ちから われ</sup>主我の力よ、我  
<sup>なんぢ あい</sup>爾を愛せん、<sup>しゅ われ かため われ かくれが</sup>主は私の防固、私の避所なり、  
<sup>せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ</sup>聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常聖の者よ、我等を憐めよ、 )

司祭) <sup>もんもん つつし き</sup>門、門、敬みて聽くべし、

われしんず、ひとつのかみちちぜんのうしゃ、てん  
我 信 一 神 父 全 能 者 天

とち、みゆるとみえざるばんぶつをつくりし  
地 見 見 萬 物 造

しゅを、またしんず、ひとつのしゅイイススハリス  
主 又 信 一 主

トスカみのどくせいの子、よろづよのさき  
神 獨 生 子 萬 世 前

にちちよりうまれ、ひかりよりのひかり、  
父 生 光 光

まことのかみよりのまことのかみ、うま  
真 神 真 神 生

れしものにてつくられしにあらず、ちち  
者 造 非 父

といっ たい に し て ば ン ぶ つ か れ に つ く ら れ 、  
 一 體 萬 物 彼 造

わ れ ら ひ と び と の た め 、 ま た わ れ ら の す く い  
 我 等 人 人 の 爲 又 我 等 救

の た め に て ん よ り く だ り 、 せ い し ん お よ び  
 爲 天 降 聖 神 及

ど う て い ぢ ゃ ま り や よ り み を と り ひ と と な  
 童 貞 女 身 取 人

り 、 わ れ ら の た め に ポ ン テ ィ イ ピ ラ ト の と き じ ゅ う  
 我 等 爲 時 十

じ か に く ぎ う た れ 、 く る し み を う け ほ う  
 字 釘 苦 受 葬

む ら れ 、 だ い さ ん じ つ に せ い し ゚ に か な い て  
 第 三 日 聖 書 應

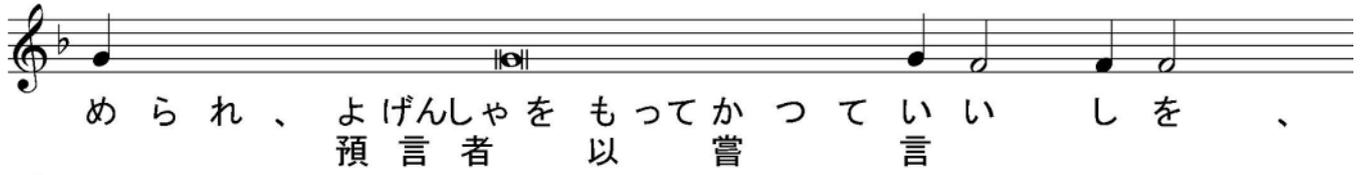
ふ く か つ し 、 て ん に の ぼ り 、 ち ち の み ぎ に  
 復 活 天 升 父 右

ざ し 、 こ う え い を あ ら わ し て い け る も の  
 坐 光 榮 顯 生 者

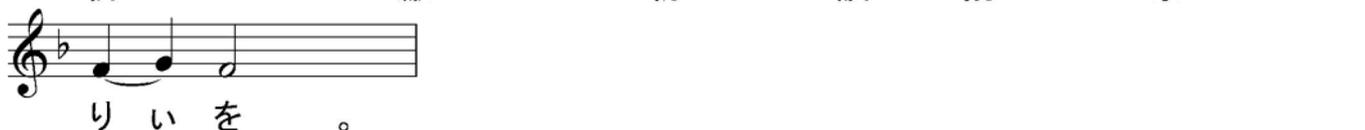
と し せ し も の と を し ん ぱ ん す る た め に ま た き た  
 死 者 の 審 判 爲 還 來

り 、 そ の く に お わ り な か ら ん を 、 ま た し ん  
 其 國 終 又 信

ず 、 せ い し ん し ゅ い の ち を ほ ど こ す も の ち ち よ り  
 聖 神 主 生 命 施 者 父



司祭) <sup>ただ た おそ た つつし あんわ せい ささげもの たてまつ</sup> 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる獻物を奉らん、



<sup>じん とも あ</sup> 人と偕に在らんことを、



司祭) <sup>こころうえ むか</sup> 心 上に向うべし、



司祭) <sup>しゆ かんしゃ</sup> 主に感謝すべし、



司祭) ( 黙誦: <sup>えいざい しゆさい しゆ かんしゃ ぜんのおしや おが</sup> 永在の主宰・主・神・父・全能者・拜まるる者よ、<sup>もの なんぢ さんび なんぢ</sup> 爾を讚美し、爾

<sup>かしやう なんぢ さんよう なんぢ ふくはい なんぢ かんしゃ なんぢひとりじつざい</sup> を歌頌し、爾を讚揚し、爾に伏拜し、爾に感謝し、爾獨實在す

<sup>かん さんえい かいご こころ けんび たましい もつ なんぢ これいち ほうじ</sup> る神を讚榮し、悔悟の心と謙卑の靈とを以て、爾に此の靈智の奉事を

<sup>ささ まこと とうぜん まこと ぎ まこと なんぢ せい いげん かな</sup> 獻ぐるは、誠に當然に誠に義にして、誠に爾が聖位の威嚴に適えり、

<sup>けだしなんぢ われら なんぢ しんじつ し たま しゆ しゆさい だれ よ なんぢ</sup> 蓋爾は我等に爾の眞實を知るを賜いし主なり、主宰よ、孰か能く爾の

<sup>のうりよく い なんぢ ことごと さんび つた なんぢ しよじ しよきせき の た</sup> 能力を言い、爾が悉くの讚美を傳え、爾が諸時の諸奇蹟を宣ぶるに堪

<sup>なんぢ ばんゆう しゆさい てん ち み み ばんぶつ しゆ こうえい ほうざ</sup> えん、爾は萬有の主宰、天と地、見ゆると見えざる萬物の主、光榮の寶座

<sup>ざ ふち かんが はじめ み べ はか べ かたど べ かわ</sup> に坐し、淵を鑿み、始なく、見る可からず、測る可からず、象る可からず、變

<sup>もの わ しゆ おおい かんおよ きゆうせいしゆ われら たのみ</sup> らざる者、我が主イイススハリストス、大なる神及び救世主、我等の恃な

<sup>もの ちち くれ なんぢ しぜん ぞう どうけい するし おのれ うち なんぢちち あらわ</sup> る者の父なり、彼は爾が至善の像、同形の印、己の中に爾父を顯

もの せいかつ ことば まこと かみ えいえん ちえい のち せいせい のうりよく まこと ひかり  
す者、生活の言、眞の神、永遠の智慧・生命・成聖・能力・眞の光

かれ よ せいしんあらわ すなわちしんじつ しん ぎし おんし しょうらい  
なり、彼に因りて聖神現れたり、乃眞實の神、義子とする恩賜、将来の

しぎょう へいし えいふく はじめ せいかつ ほどこ ちから せいせい いづみ ことごと  
嗣業の聘質、永福の始、生活を施す力、成聖の泉なり、悉くの

ゆうげんゆうち ぞうぶつ かれ かた なんぢ ほうじ なんぢ えいえん さんえい けん  
有言有智の造物は、彼に固められて爾に奉事し、爾に永遠の讚榮を獻

ず、<sup>けだしばんゆう なんぢ つと てんし てんししゅ ほうざ しゅせい しゅりょう けんぺい</sup>  
蓋萬有は爾に務む、天使・天使首・寶座・主制・首領・權柄・

のうりよく たもく なんぢ さんび なんぢ めぐ た おのおの  
能力・多目のヘルヴィムは爾を讚美し、セラフィムは爾を環りて立つ、各

りくよく によくそのおもて おお によくそのあし おお によくもつ と と  
六翼あり、二翼其面を蔽い、二翼其足を覆い、二翼を以て飛び、緘ぢざる

くち もだ さんえい もつ たがい あいよ  
口、黙さざる讚榮を以て互に相呼ぶ、 )

司祭) <sup>かちうた うた よ さけ い</sup> 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、



め あ が め ほ お め へ ら あ る 、 い と た  
崇 讚 至 高  
か き に オ サ ン ナ 、 い と た か き に オ サ  
至 高  
ン ナ 。

司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我等罪ある者も此の福たる軍と偕に籲びて曰う、爾

は聖なる哉、誠に至聖なる哉、爾が聖位の威厳は測り難し、爾は悉

くの行爲に聖なり、義と眞の審判とを以て悉く我等に施ししに因る、

蓋神よ、爾は地より塵を取りて人を造り、爾の像を以て之を貴くし、

之を甘美なる地堂に置き、之に爾の誠を守るが爲に、死せざる生命と永

福の樂とを約し給えり、然れども彼は、爾彼を造りし眞の神に背き、

蛇の誘に迷わされ、己の罪に殺されしにより、神よ、爾は義の審判を

以て彼を地堂より此の世に逐い出だし、彼を造るが爲に取りたる土に歸し、

爾のハリストスを以て、彼が爲に復生の救を設け給えり、至善者よ、蓋

爾は終に至るまで、爾が造りし物より顔を避けず、爾が手の行爲を忘れ

ず、乃爾が仁慈の憐に因りて、多方を以て之を顧み、預言者を遣

し、爾の聖人、累代爾を喜ばしし者を以て異能を行い、爾の僕諸

預言者の口を以て我等に告げて、預め將來の救を知らしめ、法律を賜

いて助となし、諸天使を立てて守護者となし、時の満つるに及びて、我等に告

ぐるに爾の子を以てせり、爾は彼を以て世世を造れり、彼は爾が光榮の

光、爾が聖位の肖像なり、彼は其能力の言にて萬物を扶持して、

己を爾神・父に匹しくするを僭とせず、然れども永在の神にして地に顯

ひと とも いま せい どうていぢょ み と おのれ むなし ぼく かたち  
 れ、人と偕に在し、聖なる童貞女より身を取り、己を虚くし、僕の形を  
 う われら ひせん からだ に もの たま われら そのこうえい かたち に  
 受け、我等の卑賤の體に肖たる者となり給えり、我等を其光榮の形に肖た  
 る者となさんが爲なり、蓋人に因りて罪は世に入り、罪に因りて死も亦入り  
 しにより、爾の獨生子、爾神・父の懷に居る者は、婦即聖なる童  
 ていぢょ えいていどうぢょ うま ほうりつ もと あ あまん おのれ み おい  
 貞女・永貞童女マリヤより生れ、法律の下に在りて、甘じて己の身に於  
 つみ ぎてい うち し もの なんぢ うち ふくせい ため  
 て罪を擬定せり、アダムの中に死する者が爾のハリストスの中に復生せん爲  
 なり、彼は此の世に居り、救を施す誠命を賜い、我等を偶像の惑より脱  
 し、我等を導きて爾眞の神・父を知るに至らしめ、我等を、選を蒙る  
 ぞく おう しんぴん せい たみ おのれ え みづ もつ われら きよ せいしん  
 族、王たる神品、聖なる民として己に獲て、水を以て我等を淨め、聖神  
 もつ せい おのれ あがない われらつみ もと う もの つな ところ  
 を以て聖にし、己を贖として、我等罪の下に賣られたる者を繋ぎし所  
 し あた おのれ もつ ぼんゆう じゅうまん ため じゅうじか よ ちごく くだ  
 の死に予え、己を以て萬有を充滿するが爲に、十字架に由りて地獄に降  
 り、死の病を釋き、第三日に復活して、凡の肉體の爲に死より復活す  
 みち ひら けだしふはい いのち かしら つな あた ししや うち しゅせい  
 る途を啓き、(蓋腐敗は生命の首を繋ぐ能わず)死者の中より首生する  
 もの し もの うち しゅじつ み みづか ぼんゆう うち ぼんじ はじめ  
 者として、死せし者の中に首實の果となれり、親ら萬有の中に萬事の首始  
 たらんが爲なり、天に升起、爾が至大位の右に其高きに坐し、再び來り  
 かくじん そのおこない よ むく たま かれ われら そのすくい ほどこ くるしみ  
 て、各人に、其行に依りて報い給わん、彼は我等に其救を施す苦  
 きおく のこ すなわちこ われら かれ いましめ よ ささ ところ もの  
 の記憶を遺せり、即此の我等が彼の誠に因りて獻げし所の者なり、  
 けだしおのれ せかい いのち ため わた よ そのじゅう えいえん きおく いのち  
 蓋己を世界の生命の爲に付しし夜、其自由にして永遠に記憶すべき生命  
 ほどこ し い のぞ そのせい しじょうむてん て へい と なんぢ  
 を施すの死に出づるに臨みて、其聖にして至淨無玷なる手に餅を取り、爾  
 神・父に捧げ、感謝し、祝讚し、成聖し、擘きて、 )

司祭) 其聖なる門徒及び使徒に予えて曰えり、取りて食え、是我が體、爾等の爲に擘かる

る者、罪の赦を得るを致す、



司祭) ( 黙誦: 同 <sup>おなじ</sup>く <sup>ぶどうじる</sup>葡萄汁を <sup>も</sup>盛る <sup>しゃく</sup>爵を <sup>と</sup>取りて <sup>みづ</sup>水を <sup>わ</sup>和し、<sup>かんしゃ</sup>感謝し、<sup>しゆくさん</sup>祝讃し、<sup>せいせい</sup>成聖して、 )

司祭) 其 <sup>そのせい</sup>聖なる <sup>もんとおよ</sup>門徒及び <sup>しと</sup>使徒に <sup>あた</sup>予えて <sup>い</sup>曰えり、<sup>みなこれ</sup>皆之を <sup>の</sup>飲め、<sup>これわれ</sup>是我の <sup>しんやく</sup>新約の <sup>ち</sup>血、<sup>なんぢら</sup>爾等 <sup>およ</sup>及び

<sup>おお</sup>衆くの <sup>ひと</sup>人の <sup>ため</sup>爲に <sup>なが</sup>流さるる <sup>もの</sup>者、<sup>つみ</sup>罪の <sup>ゆるし</sup>赦を得る <sup>え</sup>を <sup>いた</sup>致す、



司祭) ( 黙誦: 此 <sup>これ</sup>を行 <sup>おこな</sup>いて <sup>われ</sup>我を <sup>きおく</sup>記憶せよ、<sup>けだしなんぢら</sup>蓋 <sup>こ</sup>爾等 <sup>こ</sup>此の <sup>へい</sup>餅を <sup>くら</sup>食ひ、<sup>こ</sup>此の <sup>しゃく</sup>爵を <sup>の</sup>飲む <sup>ごと</sup>毎に、

<sup>われ</sup>我の <sup>し</sup>死を <sup>つた</sup>傳え、<sup>われ</sup>我の <sup>ふくかつ</sup>復活を <sup>みと</sup>認む、<sup>しゆさい</sup>主宰よ、<sup>ゆえ</sup>故に <sup>われら</sup>我等も、<sup>かれ</sup>彼が <sup>すくい</sup>救を <sup>ほどこ</sup>施す

<sup>くるしみ</sup>苦、<sup>いのち</sup>生命を <sup>ほどこ</sup>施す <sup>じゅうじか</sup>十字架、<sup>みつか</sup>三日の <sup>ほうむり</sup>瘞、<sup>し</sup>死よりの <sup>ふくかつ</sup>復活、<sup>てん</sup>天に <sup>のぼ</sup>升る <sup>こと</sup>事、<sup>なんぢ</sup>爾

<sup>かみ</sup>神・<sup>ちち</sup>父の <sup>みぎ</sup>右に <sup>ぎ</sup>坐する <sup>こと</sup>事、<sup>こうえい</sup>光榮にして <sup>おそ</sup>畏る <sup>かれ</sup>べき <sup>さいど</sup>彼が <sup>こうりん</sup>再度の <sup>きおく</sup>降臨を <sup>きおく</sup>記憶して、 )

司祭) <sup>なんぢ</sup>爾の <sup>たまもの</sup>賜を、<sup>なんぢ</sup>爾の <sup>しょぼく</sup>諸僕より、<sup>しゅう</sup>衆の <sup>ためいっさい</sup>爲一切の <sup>ため</sup>爲に <sup>なんぢ</sup>爾に <sup>たてまつ</sup>獻りて、

しゅう や あ な んぢ を あ が あ め う た い 、 しゆ  
主 爾 讃 歌 主  
や あ な んぢ を あ が め う た あ い 、 なんぢを ほ  
爾 讃 歌 爾 讃  
め あ げ 、 な あ んぢ を ほ め え あ げ 、  
揚 爾 讃 揚  
な あ んぢ に かんしゃ し 、 な あ んぢ に い か あん  
爾 感謝 爾 感  
しゃ し 、 わ が か み や な んぢ に い の るう  
謝 我 神 爾 禱  
い の る 、 わ が あ か み や な あ んぢ に い  
禱 我 神 爾 禱

の おる う、わ が か み や なあ んぢ に  
我 神 爾

い の お るうい の る、わ が か あ み や  
禱 禱 我 神

な んぢ に い の る、な あ んぢ に い い の  
爾 禱 爾 禱

る。

司祭) ( 黙誦: 至聖なる主宰よ、是を以て我等も堪えるざる僕、我等の義に因るに非ず、( 蓋  
ち あ なん ぜん な すなわちなんぢ あつ われら そそ なんぢ じれん こう  
地に在りて何の善をも爲さず) 乃 爾 が厚く我等に注ぎし 爾 の慈憐と宏  
おん よ なんぢ せい さいだん ほうじ え もの あえ なんぢ せい  
恩とに依りて、 爾 の聖なる祭壇に奉事するを獲し者は、敢て 爾 の聖なる  
さいだん ちか なんぢ せいたいせいけつ しんぞう ささ なんぢ いの  
祭壇に近づき、 爾 がハリストスの聖體聖血の眞像を獻げて 爾 に祈り、  
なんぢ よ しょせい せい もの なんぢ しぜん じんあい よ なんぢ せいしん  
爾 を籲ぶ、諸聖の聖なる者よ、 爾 が至善の仁愛に藉りて、 爾 の聖神を  
われらおよび此の奠えたる祭品に臨ましめ、之に祝福し、之を聖にし、之を  
あらわ  
顯して、 )

司祭) ( 黙誦: 第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ  
り上ぐる事勿れ、尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、 潔  
こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま だいさんじ なんぢ し  
き心を我に造り、正しき 靈を我の衷に改め給え、第三時に 爾 の至  
せいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と あ なか  
聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐる事勿れ、  
なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ かんばせ お  
尚我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、我を 爾 の顔より逐うこと  
なか なんぢ せいしん われ と あ なか だいさんじ なんぢ せいしん  
勿れ、 爾 の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、第三時に 爾 の至聖神を  
なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と あ なか なおわれら  
爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取り上ぐる事勿れ、尚我等  
なんぢ いの もの うち これ あらた  
爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、 )

司祭) 此の餅を將て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの眞の尊體と爲し、ア

ミン。此の爵<sup>こしゃく</sup>を将<sup>もつ</sup>て、主<sup>しゅ</sup>・神<sup>かみ</sup>・我等<sup>われら</sup>の救<sup>きゅう</sup>世<sup>せい</sup>主<sup>しゅ</sup>イイススハリストスの真<sup>まこと</sup>の尊<sup>そん</sup>血<sup>けつ</sup>、ア

ミン、世界<sup>せかい</sup>の生命<sup>いのち</sup>の爲<sup>ため</sup>に流<sup>なが</sup>されし者<sup>もの</sup>と爲<sup>な</sup>し、アミン。爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>を以<sup>もつ</sup>て之<sup>これ</sup>を變<sup>へん</sup>化<sup>か</sup>せよ、

アミン。アミン。アミン。

( 黙誦<sup>もくじゆ</sup>：我等<sup>われら</sup>衆<sup>しゆ</sup>人<sup>じん</sup>一<sup>いつ</sup>餅<sup>ぺい</sup>一<sup>いつ</sup>爵<sup>しゃく</sup>を領<sup>う</sup>くる者<sup>もの</sup>を、惟<sup>ゆい</sup>一<sup>いつ</sup>の聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>に體<sup>たい</sup>合<sup>ごう</sup>するを以<sup>もつ</sup>

互<sup>たがい</sup>に和<sup>わ</sup>合<sup>ごう</sup>せしめ、我<sup>わ</sup>が中<sup>うち</sup>一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>も、爾<sup>なんぢ</sup>がハリストスの聖<sup>せい</sup>體<sup>たい</sup>聖<sup>せい</sup>血<sup>けつ</sup>を領<sup>う</sup>くるを以<sup>もつ</sup>

て、審<sup>しん</sup>案<sup>あん</sup>或<sup>ある</sup>は定<sup>てい</sup>罪<sup>ざい</sup>を得<sup>え</sup>るを致<sup>いた</sup>す勿<sup>なか</sup>れ、乃<sup>すな</sup>我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>に古<sup>こ</sup>世<sup>せい</sup>より爾<sup>なんぢ</sup>の喜<sup>よろこび</sup>を

爲<sup>な</sup>しし諸<sup>しよ</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>・元<sup>げん</sup>祖<sup>そ</sup>・列<sup>れつ</sup>祖<sup>そ</sup>・太<sup>たい</sup>祖<sup>そ</sup>・預<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>・使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>・傳<sup>でん</sup>道<sup>どう</sup>者<sup>しゃ</sup>・福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>者<sup>しゃ</sup>・致<sup>ち</sup>

命<sup>めい</sup>者<sup>しゃ</sup>・表<sup>ひょう</sup>信<sup>しん</sup>者<sup>しゃ</sup>・教<sup>きょう</sup>師<sup>し</sup>、及<sup>およ</sup>び凡<sup>およ</sup>そ信<sup>しん</sup>を以<sup>もつ</sup>て終<sup>おわ</sup>りし義<sup>ぎ</sup>なる靈<sup>たましい</sup>と偕<sup>とも</sup>に、慈<sup>じ</sup>

憐<sup>れん</sup>と恩<sup>おん</sup>寵<sup>ちよう</sup>とを獲<sup>え</sup>せしめ給<sup>たま</sup>え、 )

司祭<sup>こと</sup> 特<sup>しせい</sup>に至<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>至<sup>し</sup>潔<sup>けつ</sup>にして至<sup>いた</sup>りて讚<sup>さん</sup>美<sup>び</sup>たる我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の女<sup>ぢよ</sup>宰<sup>さい</sup>・生<sup>しょう</sup>神<sup>しん</sup>女<sup>ぢよ</sup>・永<sup>えい</sup>貞<sup>てい</sup>童<sup>どう</sup>女<sup>ぢよ</sup>マ

リヤと偕<sup>とも</sup>に、

【 常に福 に代えて 】 ※祭日に別の歌に代わることあり

おんちやうを みちこおむるもおのおよ、かみのつかいの  
恩寵 満蒙者 神使  
むれとひとのやからは みなあ、なんぢ  
群 人 族 皆 爾  
をよろこぶ。なんぢは せえいせられえいでん、  
喜 爾 聖 殿  
ちえなあるうてんどお う、どうていぢよのおほおまれ  
知 慧 天 堂 童 貞 女 譽  
なあり、よのなきさきよりわがかみ  
世 無 前 我 神  
なあるもの、なんぢよりみいをうけ、みどりご  
者 爾 身 受 嬰 児

司祭) ( 黙誦: 聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、( 某 ) 及

び爾が諸聖人と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給え、神よ、彼等の祈禱

に因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記

憶し給え、

神の奴婢( 某 ) の救贖・眷顧・諸罪の赦の爲に禱る、

神の奴婢( 某 ) の靈の安息の爲、之を光る處、悲と歎との

遠ざかる所に置くが爲に禱る、我が神よ、彼等を爾が顔の光の照す

所に安置安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾の聖・公・使徒の教會、世界の極より極に至

る者を記憶し、爾がハリストスの尊き血にて獲し所の者を平安にし、及

び此の聖なる堂を堅固にして世の終に至らしめ給え、主よ、此の祭物を爾

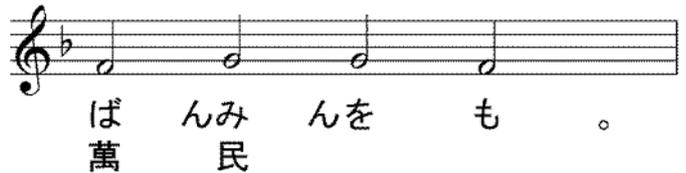
に獻げし者、及び其誰が爲に、誰を以て、誰に代りて獻しを記憶せよ、

主よ、爾の諸聖堂に物を獻り、善業を行い、及び貧者を記憶す

もの きおく なんぢ ゆたか てんじょう おんし もつ かれら むく てん もの  
る者を記憶して、爾が豊なる天上の恩賜を以て彼等に酬い、天の物を  
もつ ち もの か ふきゅう もの もつ ふはい もの か かれら たま しゅ  
以て地の物に易え、不朽の物を以て腐敗の物に易えて彼等に賜え、主よ、  
こうや さんれい がんけつ ちくつ あ もの きおく しゅ どうてい けいけん きんしよく  
曠野・山嶺・巖穴・地窟に在る者を記憶せよ、主よ、童貞・敬虔・禁食・  
けつじょう もつ いのち わた もの きおく しゅ わくに てんのう なんぢ こち  
潔淨を以て生を度る者を記憶せよ、主よ、我が國の天皇、爾が斯の地  
おう よみ もの きおく しんじつ ぶぐじんじ ぶぐ かれ お たたかい  
に王たるを嘉せし者を記憶し、眞實の武具仁慈の武具を彼に佩ばしめ、戦  
ひ おい そのこうべ おお そのひぢ つよ そのみぎ て たこ そのくに けんご  
の日に於て其首を蔭い、其臂を強くし、其右の手を高うし、其國を堅固  
およ たたかい ほつ いほうみん かれ きふく うば べからざる ぶか  
にし、凡そ戦を欲する異邦民を彼に歸服せしめ、奪うべからざる深き  
へいあん かれ たま かれ こころ なんぢ きょうかい ため およ なんぢ しゅうじん ため  
平安を彼に賜い、彼の心に爾が教會の爲、及び爾が衆人の爲に  
ぜんじ つ たま かれ へいわ われら およそ けいけん けつじょう もつ てん  
善事を告げ給え、彼の平和により、我等が凡の敬虔と潔淨とを以て、恬  
せいあんぜん いのち わた ため しゅ くに つかさど もの きおく ぜん  
静安然として生を度らんが爲なり、主よ、國を司る者を記憶せよ、善  
もの ぜん まも あく もの なんぢ じんじ もつ ぜん もの な たま しゅ  
なる者を善に守り、悪なる者を爾の仁慈を以て善なる者と爲し給え、主よ、  
ここ た しゅうじん およ や あた ゆえ よ きた もの きおく なんぢ じ  
此に立つ衆人、及び已む能わざる故に因りて來らざる者を記憶し、爾が慈  
れん おお よ かれら われら あわれ たま かれら くら もろもろ よきもの み  
憐の多きに因りて、彼等と我等とを憐み給え、彼等の庫に諸の善物を盈  
たし、かれら ふうふ へいわ どうしん まも みどりご よういく しょうねん くんどう  
たし、彼等の夫婦を平和と同心とに護り、嬰兒を養育し、少年を訓導  
ろうしゃ ふち こころせば もの なぐさ さん もの あつ まよ  
し、老者を扶持し、心狭みたる者を慰め、散じたる者を聚め、迷わされ  
もの かえ なんぢ せい こう した きょうかい あ たま おき くるし  
し者を歸して、爾が聖・公・使徒の教會に合わせ給え、汚鬼に苦めらる  
もの と こうかい もの とも こうかい りょこう もの とも りょこう やもめ  
る者を釋き、航海する者と偕に航海し、旅行する者と偕に旅行し、嫠婦を  
かば みなしご まも とりこ もの すく やまい うれ もの いや たま かみ  
庇い、孤子を護り、擄となりし者を救い、病を患うる者を醫し給え、神  
よ、さいばん こうさん るざい くえき およ およ うれい なやみ あやうき おもの き  
よ、裁判・鑛山・流罪・苦役、及び凡そ憂愁と患難と危難とに居る者を記  
おく しゅわ かみ およ なんぢ おおい あいれん もと もの またわれら あい  
憶せよ、主我が神よ、凡そ爾の大なる愛憐を求むる者、又我等を愛す  
もの われら にく もの われらあた もの かわ いの たく もの およ なんぢ  
る者、我等を惡む者、我等當らざる者に代り祈るを託せし者、及び爾の  
しゅうじん きおく しゅう なんぢ ゆたか じれん そそ しゅう そのもと ところ およ  
衆人を記憶し、衆に爾の豊なる慈憐を注ぎ、衆に其求むる所、凡  
すくい ため せつよう もの あた たま かみ われらし あるい わす  
そ救の爲に切要なる者を予え給え、神よ、我等知らざるにより、或は忘  
あるい な おお きおく もの なんぢかくじん せいちょう せい  
るにより、或は名の多きによりて記憶せざる者は、爾各人の生長と姓

めい し おのおのひと そののは たいない し もつ みづか これ きおく  
 名とを知り、各 人を其母の胎内より知るを以て、親ら之を記憶せよ、  
 けだししゅ なんぢ たすけ もの たすけ のぞみ もの のぞみ たいふう あ もの きゆう  
 蓋主よ、爾は助なき者の倚助、望なき者の冀望、颱風に遭う者の救  
 しゃ こうかい もの みなと やまい うれ もの いし なんぢみづか しゅうじん ため  
 者、航海する者の埠、病を患う者の醫師なり、爾親ら衆人の爲  
 に、各 其求むる所となり給え、蓋各人を知り、其願と其家と其需  
 とをすればなり、主よ、此の都邑と地方とを、饑饉・疫 病・地震・水難・火難・  
 けんなん がいこう ないらん すく たま  
 劔難・外攻・内亂より救い給え、 )

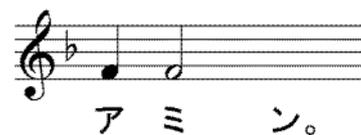
司祭) 主よ、殊に 教會を 司る 尊貴なる我等の全日本の府主 教セラフィムを記憶し、  
 かれ へいあん ぶなん そんなき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた  
 彼を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う  
 る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



司祭) ( 黙誦: 主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正教者の凡の主教品を記憶  
 せよ、主よ、爾が慈憐の多きに因りて、我不當の者をも記憶し、我に凡そ  
 じゆう じゆう ざいか ゆる たま わ しよざい よ なんぢ せいしん  
 自由による自由によらざる罪過を赦し給え、我が諸罪に因りて、爾が聖神  
 の恩寵の奠えたる祭品に臨むを遏むる勿れ、主よ、司祭品、ハリストスに  
 よ ほさいひん およ ことごと しんびん きおく われらなんぢ せい さいだん めぐ た  
 因る輔祭品、及び悉くの神品を記憶し、我等爾の聖なる祭壇に環り立  
 もの うち ひとり はち う なか しゅ なんぢ じんじ もつ われら かえり  
 つ者の中、一をも羞を承けしむる勿れ、主よ、爾の仁慈を以て我等を顧  
 み、爾の豊なる恩恵を以て我等に現れ、順和にして利益を爲す氣候を  
 われら たま ち ほうさく な かんう たま なんぢ おんたく もつ とし こうむ  
 我等に賜い、地の豊作を爲す甘雨を賜い、爾の温澤を以て年に冠らし、  
 なんぢ せいしん ちから もつ しよきょうかい ぶんき おさ いほうみん きょうぼう しづ  
 爾が聖神の力を以て諸教會の分岐を治め、異邦民の驕暴を鎮め、  
 しょういたん ぶんき すみやか やぶ たま わ かみ われらしゅうじん なんぢ くに い  
 諸異端の紛起を速に壊り給え、我が神よ、我等衆人を爾の國に入れ  
 ひかり こひる こ あら なんぢ へいあん なんぢ あい われら たま けだし  
 て、光の子晝の子と顯わし、爾の平安と爾の愛とを我等に賜え、蓋  
 なんぢ ばんじ もつ われら あた  
 爾は萬事を以て我等に予えり、 )

司祭) 並に我等に、口を一にし 心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を

さんえいさんしょう たま いま いつ よよ  
讃 榮 讃 頌 するを賜え、今も何時も世に、

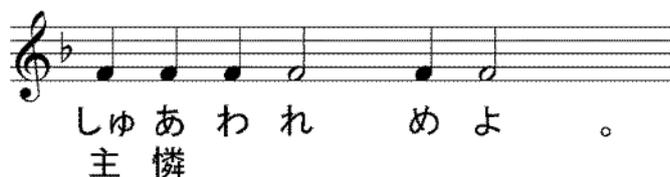


司祭) <sup>ねがわ おおい かみ わ きゆうしゅ</sup>願くは <sup>あわれみ なんぢしゅうじん とも あ</sup>大なる神、我が救主イイスハリストスの憐は、爾衆人と偕に在ら  
んことを、



【 増聯禱 】

司祭) <sup>われらしよせいじん きおく またまたあんわ しゅ いの</sup>我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



司祭) <sup>すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの</sup>已に獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



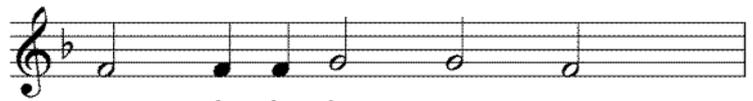
司祭) <sup>ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう</sup>人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と  
<sup>う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの</sup>して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



司祭) <sup>われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの</sup>我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、

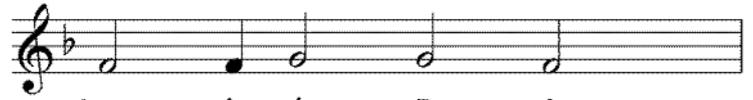


司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



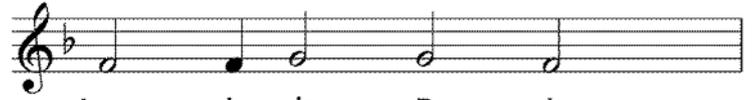
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい</sup> 此の日の 純 全・成 聖・平 安・無 罪ならんことを主しゅに求む、<sup>もと</sup>



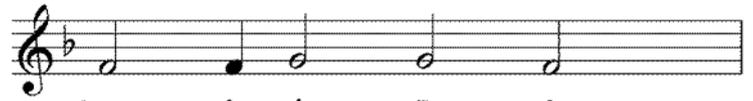
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま</sup> 平 安の天 使、正 しき 教 導 師、吾 が靈 體の守 護 者 を賜 わんことを主しゅに求む <sup>もと</sup>



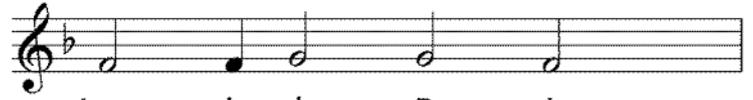
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる</sup> 我 等 の罪 と 過 とを宥 め 赦 さんことを主しゅに求む、 <sup>もと</sup>



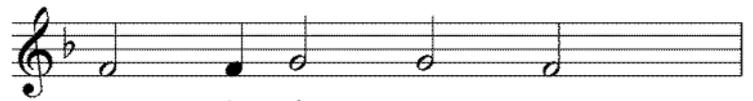
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま</sup> 我 等 の 靈 に善 にして益 ある 事、及 び世 界に平 安 を賜 わんことを主しゅに求む、 <sup>もと</sup>



しゅ たま え よ 。  
主 賜

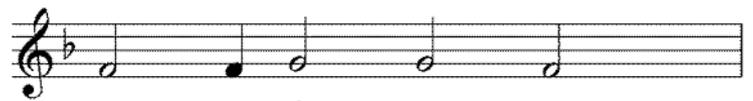
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ</sup> 我 等 の生 命の 餘 日 を平 安 と痛 悔 とを以 て終 らんことを主しゅに求む、 <sup>もと</sup>



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我 等 の生 命の 終 がハリスティアニンに 適 い、疾 なく、耻 なく、平 安 なる こと、及 び

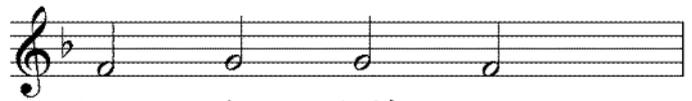
<sup>おそ しんばん おい よろ こたえ たま</sup> ハリス トスの 畏 る べき 審 判 に於 て宜 しき 對 をなすを賜 わんことを求む、 <sup>もと</sup>



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび</sup> 信 の 同 一 と 聖 神 の 體 合 とを求 めて、我 等 己 の身 及 び 互 に 各 の身 を以 て、并

<sup>ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup> に 悉 くの我 等 の生 命 を以 て、ハリス トス 神 に委 託 せん、



しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: わ かみすくい かみ なんぢ すで われら たま いま たま ところ しょおん ため  
 当然に 爾に感謝するを我等に訓え給え、我が神、此の 獻物を享けし主よ、  
 なんぢわれら れいたい もろもろ けがれ きよ なんぢ おそ ところ もつ せいじ  
 爾我等を靈體の 諸の汚より浄め、爾を畏るる心を以て聖事を  
 おこな おし たま ねがわ わ りょうしん きよ あかし もつ なんぢ せいひん ぶん  
 行うを教え給え、願くは我が良心の浄き證を以て爾が聖品の分を  
 う 領けて、爾がハリストスの聖體血に體合し、並に当然に之を領くるに藉り  
 て、ハリストスが我等の心に居るを得、及び爾が聖神の堂とならん、嗚呼我  
 かみ われら うちひとり こ なんぢ おそ てんじょう きみつ まえ つみ え  
 が神よ、我等の中一人をも、此の爾の畏るべき天上の機密の前に罪を獲せ  
 な またよろ かな これ う よ れいたい や いた  
 しむる勿く、又宜しきに合わずして之を領くるに依りて、靈體の病むを致さし  
 むる勿れ、乃我等が呼吸の絶えんとするに至るまで当然に爾が聖品を領  
 くるを以て永生の引導となし、爾がハリストスの畏るべき審判の時に善く  
 い こたえ え たま われら こせい なんぢ よろこび な しょ  
 容れらるる對となすを得せしめ給え、我等も古世より爾の喜を爲しし諸  
 せいじん とも しゅ なんぢ あい もの ため そな ところ なんぢ えいえん ふくらく  
 聖人と共に、主よ、爾を愛する者の爲に備うる所の爾が永遠の福樂  
 あづか もの ため  
 に與る者となるが爲なり、 )

【 天主經 】

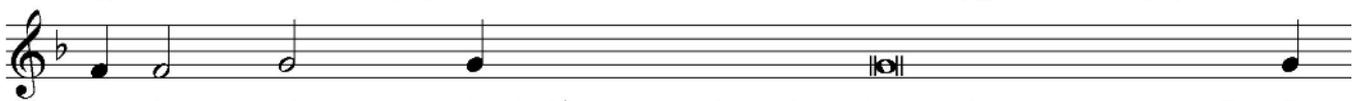
司祭) しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま  
 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



てんにいます われらのちちよ、ねがわくは  
 天在我等父願



なんぢのなはせいとせられ、なんぢのくには  
 爾名聖爾國



きたり、なんぢのむねはてんにおこなわるる  
 爾旨天行

がごとくちにもおこなわれん。わがにちよう  
如地行我日用  
のかてをこんにちわれらにあたえたまえ。  
糧今日我等與給  
われらにおいめあるものをわれらゆるすがご  
我等債者我等免如  
とく、われらのおいめをゆるしたま  
我等債免給  
え。われらをいざないにみちびかず、  
我等誘導  
なおわれらをきょうあくよりすくいたま  
猶我等凶悪救給  
え。

司祭) <sup>けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

アミン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆人に平安、

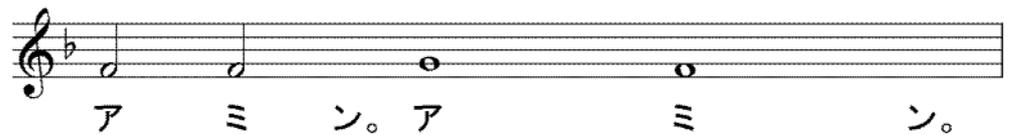
なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) <sup>なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 爾等の首を主に屈めよ、

しゅなんぢに。  
主 爾

司祭) ( 黙誦：主宰・主・慈憐の父、凡の撫恤の神よ、其首を屈めし者に福を降  
 し、之を成聖し、之を保護し、之を堅固にし、之を健立し、之を凡の悪事  
 より離して凡の善事に合せ、並に之に定罪なく、此の爾が至淨なる  
 生命を施す機密を領けしめて、罪の赦、聖神の體合を得せしめ給え、 )

司祭) 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命  
 を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世に



司祭) ( 黙誦：主イイススハリストス我等の神よ、爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶  
 座より眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、  
 來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血と  
 を我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、 )

司祭) 謹みて聽くべし、聖なる物は聖なる人に、



司祭) ( 黙誦：神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恒に食われて永く盡き  
 ず、乃領くる者を聖にす、 )

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

( 奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

【 (大パスハ) 領聖詞 】

ハリストスのせいたいをうけ、ふしいのいづみ  
 聖體領 不死泉  
 をのめよ。

【 信徒領聖 】

司祭) <sup>かみ おそ こころ しん もつ ちか きた</sup> 神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめら  
 主名因來者崇讚  
 る、しゅはかみなりわれらをてらせり。  
 主神我等照

全員) <sup>しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく</sup> 主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが

<sup>ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し</sup> 爲に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至

<sup>じゅう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゅう</sup> 淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由

<sup>じゅう ことば おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび</sup> と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並

<sup>われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた たま</sup> に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦と永生とを得るを致させ給

え、アミン。

<sup>かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き</sup> 神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機

<sup>みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちとう ごと なんぢ う</sup> 密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承

<sup>みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ</sup> け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと。主よ、祈る爾の聖なる機密を

う 領くるは、わ ため しんあんあるい ていざい 或 は 定 罪 とならず、すなわち れいたい いやし 靈 體 の 醫 とならんことを、ア  
 ミン。

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリストスのせいたいをうけ、ふしいのいづみ  
 聖體領 不死泉  
 をのめよ。  
 飲

※ 司祭が至聖所に入ってから

ア ril ル ウ イ ヤ、ア ril ル イ ヤ ア、ア ril ル ウ  
 イヤ。

司祭) ( 黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拝むべし、ハ

リストスよ、我等爾の十字架を拝み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾

は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、

皆來りてハリストスの聖なる復活を拝むべし、十字架にて喜は全世界に

臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架

に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン

よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

歡び給え、

嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく  
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら  
 もの しよざい あら たま しゅわ かみ われらなんぢ しじょう ふし てん  
 れし者の諸罪を滌い給え、主我が神よ、我等爾が至淨にして不死なる天  
 じょう せいきみつ なんぢ われら れいたい しおん せいせい いりょう たま とくろ もの  
 上の聖機密、爾が我等の靈體の施恩・成聖・醫療として賜いし所の者  
 う よ なんぢ かんしゃ ばんゆう しゅさい なんぢみづか われら なんぢ  
 を領くるに因りて爾に感謝す、萬有の主宰よ、爾親ら我等が爾のハリ  
 せいたいけつ う もつ そのはぢ え しん いつわり あい えいち ぞうえき  
 ストスの聖體血を領くるを以て、其耻を得ざる信、偽なき愛、睿智の増益、  
 れいたい いりょう しよてき くちく なんぢ いましめ じゅんしゅ ならび なんぢ  
 靈體の醫療、諸敵の驅逐、爾が誠の順守、並に爾がハリストスの  
 おそ しんぱん おい よ い こたえ いた たま  
 畏るべき審判に於て善く容れらるる對となるを致させ給え、 )

司祭) <sup>かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ</sup> 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、

われらすでにまことのひかりをみ、てんの  
 我等已真光観天  
 せいしんをうけ、ただしきしんをえて、  
 聖神受正信得  
 わかれざるせいさんしゃをおがむ、かれわれ  
 分聖三者拜彼我  
 らをすくいたまえばなあり。  
 等救給

司祭) ( 黙誦: <sup>かみ ねがわ なんぢ しよてん うえ あ なんぢ こうえい ぜんち おお われ</sup> 神よ、願くは爾は諸天の上に擧げられ、爾の光榮は全地を蔽わん、我  
<sup>ら かみ つね あが ほ</sup> 等の神は恒に崇め讃めらる、 )

司祭) <sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世に、

アミン。

しゅよ、なんぢのこうえいをうたわあんに  
 主 爾 光 榮 歌

ほ め う た を も っ て わ が く ち に み た し め た ま  
 讚 歌 以 我 口 満 給

え 、 い の ち を ほ ど こ す な ん ぢ の せ い な る き み  
 生 命 施 爾 聖 機 密

つ を う く る を わ れ ら に ゆ る せ ば な り 。  
 領 我 等 許

い の る わ れ ら を い さ ぎ よ き に ま も り 、  
 祈 我 等 潔 護

ひ び に な ん ぢ の み ち を な ら わ し め た ま え 、  
 日 日 爾 道 習 給

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ  
 ヤ 。

司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>み</sup>みて <sup>た</sup>立て、<sup>しんせい</sup>神 <sup>しじょう</sup>聖・<sup>ふし</sup>至 <sup>いのち</sup>淨・<sup>ほどこ</sup>不死にして <sup>てんじょう</sup>生命を <sup>おそ</sup>施 <sup>せい</sup>す天 <sup>おそ</sup>上 <sup>せい</sup>の畏るべき <sup>せい</sup>ハリストスの <sup>せい</sup>聖

<sup>きみつ</sup>機密 <sup>う</sup>を領けて、<sup>よろ</sup>宜しく <sup>しゅ</sup>主 <sup>かんしゃ</sup>に感謝すべし、

しゅ あ わ れ め よ 、 しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐 主 憐

司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>おんちよう</sup>の恩 <sup>もつ</sup>寵 <sup>われら</sup>を以て <sup>たす</sup>我等 <sup>すく</sup>を助け <sup>あわれ</sup>救い <sup>まも</sup>憐 <sup>まも</sup>み護れよ、

司祭) <sup>こ</sup>此 <sup>ひ</sup>の日の <sup>じゅんぜん</sup>純 <sup>せいせい</sup>全・<sup>へいあん</sup>成 <sup>むざい</sup>聖・<sup>もと</sup>平安・<sup>われら</sup>無 <sup>おのれ</sup>罪 <sup>みおよ</sup>ならん <sup>たがい</sup>ことを <sup>おのおの</sup>求 <sup>み</sup>めて、<sup>もつ</sup>我等 <sup>かみ</sup>己 <sup>いたく</sup>の身 <sup>いたく</sup>及び <sup>いたく</sup>互 <sup>いたく</sup>に

<sup>おのおの</sup>各 <sup>み</sup>の身 <sup>もつ</sup>を以て、<sup>ならび</sup>并 <sup>ことごと</sup>に <sup>われら</sup>悉 <sup>いのち</sup>くの <sup>もつ</sup>我等 <sup>かみ</sup>の生命 <sup>いたく</sup>を以て、<sup>いたく</sup>ハリストス <sup>いたく</sup>神 <sup>いたく</sup>に <sup>いたく</sup>委託 <sup>いたく</sup>せん、

しゅ な ん ぢ に 、  
 主 爾

司祭) <sup>けだしなんぢ</sup>蓋 <sup>われら</sup>爾 <sup>せいせい</sup>は我等 <sup>われら</sup>の成 <sup>なんぢ</sup>聖 <sup>こ</sup>なり、<sup>せいしん</sup>我等 <sup>けん</sup>光 <sup>いま</sup>榮 <sup>いつ</sup>を <sup>よよ</sup>爾 <sup>よよ</sup>父 <sup>よよ</sup>と子 <sup>よよ</sup>と聖 <sup>よよ</sup>神 <sup>よよ</sup>に <sup>よよ</sup>獻 <sup>よよ</sup>ず、<sup>よよ</sup>今 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>何 <sup>よよ</sup>時 <sup>よよ</sup>も <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>世

に、



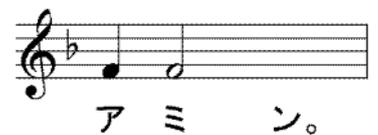
司祭) <sup>へいあん</sup> <sup>い</sup> 平安にして出づべし、



司祭) <sup>しゅ</sup> <sup>いの</sup> 主に禱らん、



司祭) <sup>なんぢ</sup> <sup>さんよう</sup> <sup>もの</sup> <sup>ふく</sup> <sup>くだ</sup> <sup>およ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>たの</sup> <sup>もの</sup> <sup>せい</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>たみ</sup> <sup>すく</sup>  
爾を讃揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救  
<sup>およ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しぎょう</sup> <sup>ふく</sup> <sup>くだ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>きょうかい</sup> <sup>じゅうまん</sup> <sup>まも</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>どう</sup> <sup>び</sup>  
い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを  
<sup>あい</sup> <sup>もの</sup> <sup>せい</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しんせい</sup> <sup>ちから</sup> <sup>もつ</sup> <sup>かれら</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>およ</sup> <sup>われら</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>たの</sup>  
愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む  
<sup>もの</sup> <sup>の</sup> <sup>こ</sup> <sup>なか</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>せかい</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しよきょうかい</sup> <sup>しよしさい</sup> <sup>わ</sup> <sup>くに</sup> <sup>てん</sup> <sup>の</sup> <sup>う</sup> <sup>およ</sup> <sup>くに</sup>  
者を遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を  
<sup>つかさど</sup> <sup>もの</sup> <sup>およ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しゅうじん</sup> <sup>へいあん</sup> <sup>たま</sup> <sup>けだし</sup> <sup>およ</sup> <sup>そ</sup> <sup>ぜん</sup> <sup>ほど</sup> <sup>こし</sup> <sup>およ</sup> <sup>そ</sup> <sup>ぜん</sup> <sup>び</sup>  
司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる  
<sup>たま</sup> <sup>もの</sup> <sup>う</sup> <sup>え</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>こうめい</sup> <sup>ちち</sup> <sup>くだ</sup> <sup>われら</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>かん</sup> <sup>しゃ</sup> <sup>ふく</sup> <sup>はい</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ちち</sup>  
賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拝を爾父と  
<sup>こ</sup> <sup>せい</sup> <sup>しん</sup> <sup>けん</sup> <sup>いま</sup> <sup>いつ</sup> <sup>よ</sup> <sup>よ</sup>  
子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



めほめられていまよりよよにいたらん。ねが  
 讚 今 世世 至 願

わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ  
 主 名 崇 讚 今 世

よにいたらん。  
 世 至

誦經) われいつ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ もつ  
 我何れの時にも主を讚め揚げん、彼を讚むるは恒に我が口に在り、我が靈は主を以  
 ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ どうと とも かれ な あが ほ  
 て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇め讚  
 めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免れし  
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ まづ  
 め給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の貧し  
 ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ おそ  
 き者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主を畏  
 るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を待む人  
 さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ わか  
 は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことなし。少  
 しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か  
 き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭) ( 黙誦： みづか ほうりつ しょよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん  
 親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せ  
 わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま  
 しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、  
 いま いつ よよ  
 今も何時も世に、 )

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ  
 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も  
 よよ  
 世に、

アミン。

※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP38【永眠者の爲の熱衷祈禱】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) かみわれら たのみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き  
 ハリストス神我等の特よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ  
 何 時 世 世 主 憐 主  
 あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
 憐 主 憐 福 降  
 せ 。

司祭) <sup>し ふくかつ</sup>死より復活せし<sup>われら まこと かみ</sup>ハリストス我等の眞の神は、<sup>そのしじょう はは こうえい</sup>其至淨なる母、光榮にして<sup>さんび</sup>讚美たる

<sup>せいしと われら せいしんぶ</sup>聖使徒、我等の聖神父<sup>だいしゅきょうせいだい</sup>カッパドキヤのケサリヤの大主教<sup>こくしょうほう</sup>聖大ヴァシリイ、克肖捧

<sup>しん わがしよしんぶ</sup>神なる我諸神父、<sup>およ しょせいじん きとう より われら あわれ すく ぜん</sup>( 某 ) 及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み救わん。善にし

<sup>ひと あい しゅ</sup>て人を愛する主なればなり、

ア ミ ン。

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
 神 我 國 天 皇 及  
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ  
 國 司 者 我 等 府 主  
 き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
 教 及 悉 正 教  
 の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り  
 等 幾 歳 護



〈 聖体礼儀終了 十字架接吻 〉

【 永眠者の爲の熱衷祈禱 <sup>リテイヤ</sup> 】

ひとをあいするきゆうせ いしゅよ、しせしぎ  
 人 愛 救 世 主 死 義

じんのたましいとともに、なんぢがぼくひの  
 人 靈 借 爾 僕 婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを  
 靈 安 彼 等

なんぢにあるふくらくのいのちに、まもり  
 爾 在 福 樂 生 命 護

たま え。しゅよなんぢがしよせいじんのあん  
 給 主 爾 諸 聖 人 安

そくするところに、なんぢがぼくひのたま  
 息 處 爾 僕 婢 靈

しいをやすんぜしめたま え。なんぢひとりひ  
 安 給 爾 獨 人

とをあいするしゅなればなり。  
 愛 主

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

なんぢはぢごくにくだりてつながれしものの  
 爾 地 獄 降 繫 者

くさりをときたるかみなり。みづから  
 鎖 釈 神 親

なんぢがぼくひのたましいをやすんぜしめ  
爾 僕 婢 靈 安

た ま え 。

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き どう て い ぢ よ 、 た ね  
獨 潔 瑕 童 貞 女 種

な く し て か み を う み し も の よ 、 か れ ら の  
神 生 者 彼 等

た ま し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま  
靈 救 祈 給

え 。

【 重聯禱 】

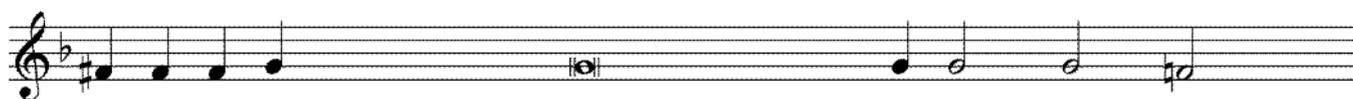
司祭) <sup>かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ</sup> 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう</sup> 又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ  
<sup>つみ ゆる ため いの</sup> る罪の赦されんが爲に禱る、

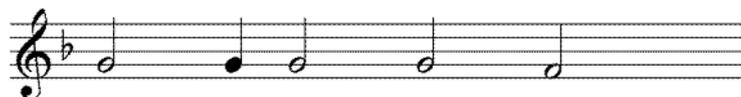
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>しゅかみ かれら たましい しょぎじん あんそく ところ い たま いの</sup> 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを祈る、



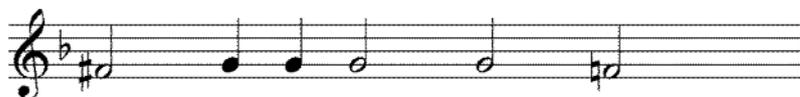
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>かれら</sup> 彼等に神の <sup>かみ</sup> 憐 <sup>あわれみ</sup> と天國と諸罪の <sup>てんごく</sup> 赦 <sup>しよざい</sup> とを賜わんことを、<sup>ゆるし</sup> ハリストス <sup>たま</sup> 我死せざる王及 <sup>わがし</sup> <sup>おうおよ</sup> び神に願う、



しゅ たま え よ。  
主 賜

司祭) <sup>しゅ</sup> 主に <sup>いの</sup> 禱らん、



しゅ あわれめよ。  
主 憐

司祭) <sup>もろもろ</sup> 諸の <sup>れいしん</sup> 靈神と <sup>もろもろ</sup> 諸の <sup>にくたい</sup> 肉體との <sup>かみ</sup> 神、<sup>し</sup> 死を <sup>ほろ</sup> 亡ぼし <sup>あくま</sup> 惡魔を <sup>むなし</sup> 虚くし、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>せかい</sup> 世界に <sup>いのち</sup> 生命を

<sup>たま</sup> 賜いし <sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>なんぢみづか</sup> 爾 <sup>ねむ</sup> 親ら <sup>なんぢ</sup> 寝りし <sup>ぼくひ</sup> 爾の <sup>たましい</sup> 僕婢( <sup>ひか</sup> 某 )の <sup>ところ</sup> 靈を <sup>しげ</sup> 光る <sup>くさば</sup> 處、<sup>へい</sup> 茂き <sup>あん</sup> 草場、<sup>あん</sup> 平

<sup>あん</sup> 安の <sup>ところ</sup> 處、<sup>やまい</sup> 病と <sup>かなしみ</sup> 悲と <sup>なげき</sup> 歎との <sup>とお</sup> 遠ざかる <sup>ところ</sup> 處に <sup>あんそく</sup> 安息せしめ、<sup>ぜん</sup> 善にして <sup>ひと</sup> 人を <sup>あい</sup> 愛する <sup>かみ</sup> 神

なるに <sup>より</sup> 因て <sup>かれら</sup> 彼等が <sup>あるい</sup> 或は <sup>ことば</sup> 言、<sup>あるい</sup> 或は <sup>おこない</sup> 行、<sup>あるい</sup> 或は <sup>おもい</sup> 思にて <sup>おか</sup> 犯し <sup>ことごと</sup> 悉くの <sup>つみ</sup> 罪を <sup>ゆる</sup> 赦し

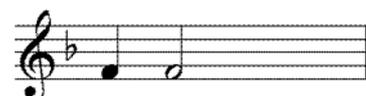
<sup>たま</sup> 給え。蓋 <sup>けだし</sup> 人一 <sup>い</sup> も <sup>つみ</sup> 生きて <sup>おこな</sup> 罪を行 <sup>もの</sup> わざる <sup>ただなんぢ</sup> 者なし、<sup>つみ</sup> 唯 <sup>なんぢ</sup> 爾は <sup>ぎ</sup> 罪なし、<sup>えいえん</sup> 爾の <sup>ぎ</sup> 義は <sup>えいえん</sup> 永遠の

<sup>ぎ</sup> 義、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>ことば</sup> 言は <sup>しんじつ</sup> 眞實なり。

<sup>けだし</sup> 蓋 <sup>われら</sup> ハリストス我等の <sup>かみ</sup> 神よ、<sup>なんぢ</sup> 爾は <sup>ねむ</sup> 寝りし <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>ぼくひ</sup> 僕婢( <sup>ふくかつ</sup> 某 )の <sup>いのち</sup> 復活と <sup>あんそく</sup> 生命と <sup>あんそく</sup> 安息な

り。我等 <sup>われら</sup> 光榮を <sup>なんぢ</sup> 爾と <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>むげん</sup> 無原の <sup>ちち</sup> 父と <sup>しせいしぜん</sup> 至聖至善にして <sup>いのち</sup> 生命を <sup>ほどこ</sup> 施す <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>しん</sup> 神とに <sup>けん</sup> 獻

<sup>いま</sup> ず、<sup>いつ</sup> 今も <sup>よよ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世世に、



ア ミ ン。

【 <sup>コンダク</sup> 永眠者の爲の小讃詞 】



ハリスト スよ、  
爾 　　んぢが ぼくひの たま しい  
　　爾 　　僕 婢 靈

を、しよ せいじんとともに、やま い  
 諸 聖 人 借 疾  
 も かなし みも なげ えきも な く、おわ  
 悲 歎 終  
 り な き い の ちの ある ところ に やすんぜ  
 生 命 處 安  
 し め た ま あ え 。  
 給

司祭) ハリストス神我等の<sup>かみわれら たのみ</sup>侍よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup>光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せい しんに きす、いまも  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に、ア ミ ン。しゅあわれめ、しゅ  
 何 時 世 世 主 憐 主  
 あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ  
 憐 主 憐 福 降  
 せ。

司祭) 死より復活し、<sup>し ふくかつ</sup>生ける者と死せし者<sup>い もの し もの</sup>を其全能<sup>そのぜんのう</sup>の手に保ち給う<sup>て たも たま</sup>ハリストス我等の<sup>われら まこと</sup>眞の

<sup>かみ</sup>神は、<sup>そのしじょう</sup>其至<sup>はは</sup>淨なる母<sup>こうえい</sup>、<sup>さんび</sup>光榮にして讚美<sup>せいしと</sup>たる聖使徒<sup>こくしょうほうしん</sup>、<sup>わがしよしんぶ</sup>克肖<sup>わがしよしんぶ</sup>捧神なる我諸神父、

( 某 ) 及び諸<sup>およ</sup>聖人<sup>しよせいじん</sup>の祈禱<sup>きとう</sup>に因て、<sup>ねむ</sup>寝りし<sup>ぼくひ</sup>僕婢( 某 )の<sup>たましい</sup>靈<sup>しよぎじん</sup>を諸義人<sup>すまい</sup>の住所<sup>い</sup>に入

れ、<sup>ふところ やす</sup>アヴラアムの懷<sup>しよぎじん</sup>に安んぜしめ、<sup>れつ くわ</sup>諸義人の列<sup>およ</sup>に加え、<sup>われら あわれ</sup>及び我等<sup>すく</sup>を憐<sup>ぜん</sup>み救わん。善

にして人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゅ</sup>なればなり、

ア ミ ン。

司祭<sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>ぼくひ</sup> 僕婢の<sup>さいわい</sup> 福なる<sup>ねむり</sup> 寢に<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>あんそく</sup> 安息を<sup>あた</sup> 與え、<sup>かれら</sup> 彼等に<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>きおく</sup> 記憶を<sup>な</sup> 爲し

たま  
給え、

え い え んの き お  
永 い 遠 んの き お  
く 、 え い え んの き  
お 憶 く 、 え い え 遠  
ん の き お 憶 く 。  
か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
神 我 國 天 皇 及  
く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
國 司 者 我 等 府 主  
き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
教 及 悉 正 教  
の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り  
等 幾 歳 護  
た ま え 。  
給

( 祈祷終了、十字架接吻 )

りようせいかんしゃしゅくぶん  
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き  
神や光 榮は 爾に歸す、神や光 榮は 爾に歸す、神や光 榮は 爾に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか  
主我が神や、爾 我罪人を棄てずして、尚 爾の聖なる機密に 與る

もの いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う  
者と致させ給うを 爾に感謝す、我堪えざる者に 爾が至 淨なる天の 賜を受く

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ  
るを容し給うを 爾に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、

われ たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち  
我が 靈と體とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を

ほどこ きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき  
施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈と體とを癒し、凡の敵

がい か われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん  
の害を驅り、我が心の目を明かにし、我が 靈の力を平安にし、耻を得ざる信

いつわり あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちよう  
とし、偽なき愛とし、睿智を充たし、爾の 誠を守らしめ、爾が神聖の恩 寵

ま なんぢ くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ  
を益し、爾の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密に

なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちよう おも またおの ため せいかつ すなわち  
て爾の成聖に護られ、常に爾の恩 寵を思い、復己が爲に生活せず、乃

なんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな  
爾我が主 宰及び恩主の爲に生活し、以て永生の望を懐き、此の世を離れて、

えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み  
永遠の息、彼の祝する者の絶えざる聲、及び爾が 顔の言い盡されぬ美善を見

もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい  
る者の限りなき 樂の處に至らん、蓋ハリストス我が神や、爾は爾を愛する

もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた  
者の眞の望と云い盡されぬ 樂なり、凡そ造を受けし者は 爾を世世に讃め歌う、

「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ  
主 宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、

およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま  
凡そ我に賜いし所の諸善、且生命を施す至 淨なる爾の機密を領けさせ給い

なんぢ かんしゃ またなんじ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した  
しを爾に感謝す、又 爾に祈る、善にして人を愛する主や、我を爾が庇の下

なんぢ つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ  
に、爾が翼の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、潔き良心を以て、

とうぜん なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだし  
當然に爾の聖體聖血を領け、以て罪の赦と永生とを得るを致させ給え、蓋

なんぢ いのち かけて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい  
爾は生命の糧、成聖の泉、諸善を賜う主なり、我等 爾と父と聖神とに光 榮

けん いま いつ よよ  
を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメオン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かけて  
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしん  
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節心

ぶく い わ しよざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん  
腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を

あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも われ たましい  
明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈

がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ われ おさ われ  
を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我

ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん すまい あらわ およそ  
を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡

あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの に ひ に  
の悪者凡の慾は、我聖體の入りに依りて爾の家となりし者より逃ぐるること、火より逃ぐ

ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ せいじゃ しよひん しんし なんぢ ぜんく  
るが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、

ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ かれら  
智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の

きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい  
祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈

せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん  
の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため  
主イイススハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ  
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悅

そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい  
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の

みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しよせいじん きとう よ  
右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢよ わ くら たましい  
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の

ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう  
光、吾が憑特と幘幘と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の

たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う  
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生み

もの わ こころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い  
し者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生

たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ こころ しょうかん ひつう わ おもい  
かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に

けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た いた つみ え  
謙遜、吾が虜となりし意念に呼還を賜い、我に呼吸の絶えんとするに至るまで、罪を獲

しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う いた ならび われ  
ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に

つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さん  
痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世世に讚

び こうえい み こうむ  
美と光榮とを満ち被る、「アミン」